

肺がん外科治療の最前線

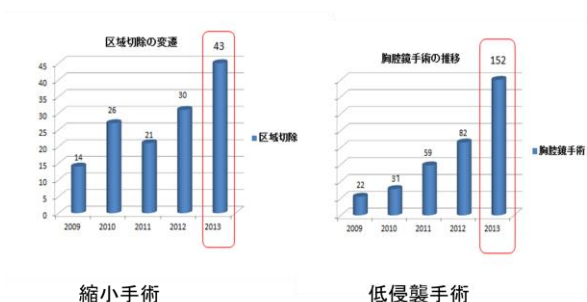
愛知県がんセンター中央病院呼吸器外科部長 坂尾幸則

がん病巣へのピンポイント攻撃が可能な抗がん剤（分子標的薬）や放射線治療（陽子線や重粒子線）の発達に伴い肺がん治療の戦略は変貌してきています。しかし、肺がんを根治する（完全に治す）ための手段としての手術の役割が減っている訳ではありません。また、がんの根治を目指すという手術の普遍的役割に加え、近年新たな課題も投げかけられています。その中で特に2つのテーマについてお話しします。①早期肺癌に対する肺機能温存（根治性を落とさずになるべく肺の切除量を減らす）②手術の低侵襲化（体の負担の少ない手術）です。肺がんの早期発見への取り組み・検診の重要性と問題点・肺機能温存手術（縮小手術）・低侵襲手術としての胸腔鏡下手術などについて紹介いたします。

胸腔鏡下手術(VATS)



当院での取り組み



我々は今後とも、患者さんにとってより恩恵の大きいと考えられる医療・外科治療を提供するための情報収集や技術向上に尚一層努めてまいります。